

依命留学報告書（要約）

学部	国際食料情報学部
学科名	国際バイオビジネス学科
職名	教授
氏名	内山智裕

1. 留学先 University of Helsinki（ヘルシンキ大学・フィンランド）
2. 研究課題 ポスト新型コロナウイルス時代における食料安全保障に資する食料・農業政策の展開および農業経営発展の研究
3. 留学期間 令和3（2021）年9月3日～令和4（2022）年9月1日

4. 留学期間中の活動報告

（新型コロナウイルスの影響）フィンランド入国条件やフライト予定が目まぐるしく変わる中での渡航となった。9月のヘルシンキ大学はリモート体制で、第5波の収束により11月から通常体制に移行したが、第6波の発生により12月から再びリモート体制へと戻り、通常復帰は4月であった。幸い、ワクチンの3回目接種は早期（1月）に受けることができ、体調を崩すこともなく、「ウィズコロナ」下のフィンランドにおける経済・社会および大学運営を体感できたのは収穫であった。

（研究の目的と成果）食料安全保障ランキング世界1位のフィンランドにおける食料安全保障や食料・農業政策を学ぶことを目的とした。フィンランドの安全保障施策の重点は、伝統的には食料やエネルギーなどの備蓄にあったが、近年はサイバーセキュリティ対策に傾斜してきた。しかし、新型コロナウイルスや滞在中に発生したロシアによるウクライナ侵攻により、備蓄の重要性が再認識されるに至った。特に、カロリーベース食料自給率が80%であっても、肥料や燃料といった生産資材をロシアやベラルーシに依存している食料安全保障は達成できないとする議論は、我が国の食料安全保障確立の道がなお険しいことを示唆するものであった。また、国土の多くが条件不利地域で国際競争力に乏しい農業が高付加価値型の輸出を志向し、フィンランド産の農産物・食品が日本のマーケットでどれだけ受け入れられるか、関係者から何度も質問されたのは印象的であった。なお、滞在中の様子や研究成果は研究室ブログ、YouTubeチャンネルや雑誌「農業」などで公開している。

（ヘルシンキ大学での勤務）客員教授として修士論文審査、博士課程副指導、大学院の集中講義などを担当した。また、大学院のカリキュラム改訂作業にも一部参加した。リモート期間が長く、学内での交流は限られたが、特に大学院教育の現状を直接知る機会を得られたのは有益であった。

（全体所感）フィンランドは治安もよく、都市部では英語によるコミュニケーションが可能で、ストレスなく過ごすことができた。今後、学生研修をフィンランドで行う橋頭堡を築けたことも収穫である。ただし、本格的な農業・農村研究を行うにあたってはフィンランド語の習得が不可欠となる。

最後に、留学を支援して下さった東京農業大学および国際バイオビジネス学科の皆様、コロナ禍でも快く受け入れていただいたMarko J. Lindroos 学科長、Leena Rantamäki-Lahtinen 講師はじめヘルシンキ大学スタッフ、家族・友人、その他支えて下さった皆様に厚く御礼申し上げます。

以上